

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

Black



繪本自來也說話

前編
貳



1910
2
13



報仇
奇談

自來也説話卷之二

武江

感和亭鬼武著
高喜齊校合

正村景国為同役 併 自來也詮義系



三畧曰端未見人莫能知天地神明與物推移變動無常因
敵轉化不為事先動而輒隨と 儲也彦山王源太郎其老父
其樂跡を手に掛三千兩乃金を奪ひ盜賊ハ元赦後の國竹俣改信の
家臣鹿野苑軍大夫と云一者成が元来奸倭邪智の曲者ま
己鈕袈子邊せを自贖て人城睥睨藩中に疎れ放蕩るる牙
仍て鏡や竹俣家を返放子逢ひ身は並所如却まに山賊と成て

可りぬるが流産山子て在赤糸を討て合子を奪ひて令をりて
 身の廻り成信ひ銀刺中まに刺く有附を捜求し程は同国
 新浮子あやむるが中頃椎津乃其願丸門之助国時父玉久を
 在鎌倉の中新浮造を恐く松次ありし折柄因形昆沙門崎と
 いへるあまきく風目止し婦人可りぬる近習乃者を以て内く
 尋じりて中宿中道住屋傳七乃抱へ清野とくる力のありとゆひ
 玉ひ染が艶色お速し其秋より彼身へ忍び通しぬるごとくも
 奈何あるとや清野は方之助乃ん子随はるを何卒廉ら
 せんを好しくする所を告げ先玉お帝鹿野苑軍太夫に世に
 舞く逗留はる可りりる信言お跟は折し方門之助お酒連の
 対手お出巧言をりて傳り流し大子は時のん子おひぬるを流産もは
 口説流し—あつせん家ど諾ぬるく流産方門之助のん子おひぬるは士と
 あれむ石抱お進退而ハ大守附子に遺さんとあるを軍太夫悦と
 入り夫よりは時の家おしめり法法と廉せんを先染を身請はて
 封邦へ延連お者とお玉り自らんお従ふ道理と信兵を拜ひ
 方門之助とおあらせ給ふ清野が身お代を傳ひ根川はてはひき
 つき軍太夫お御さく城外の僻静るるや又へ別荘を補理是に
 婿女を流く圍ひ置せぬれども先子角法おはらけの通はさき
 流産かんを慰廉せんとお酒直松具お催し毎秋方門之助
 那列お通しせ玉ひお放物のおお同へ藩中乃る沙はとて

自來也言部卷之二



新之門
 昆沙門
 嶋之

圖



柳りぬれどころあるあゝ眉を頻早てぞりきり去程に這回
 推津国久入國つた在り之助ハ鹿野苑が武備を推奉りて
 大守附子烈いれりききも玉久あも得んり新ふら皇々百翠石
 を封内を以て縣令職に付られ藩中へ劍術師斬
 兼而勅させしれり又勇源太高も這回供奉あり推津乃
 在所子到り重くも拜ひらるる等形れども新集か子古老は
 比判も荷あきそ返すに栝列先軍太夫同役とにあり
 縣令勅へると同百五十石あり鹿野苑と同席とあり
 牙ひに始而の見集形れを眼前する敵軍太夫とそれとも
 知るべしなりりるこそ是也此終依亦世は國各の封内

所々へ自來也といふ益城小賊許多延連接入自來也といはる
 札法法並令法を奪ひ歸りて遊く乃汪進めりりおん侍子
 檢査しりて勇源を而鹿野苑軍太夫兩個まで合を所とを
 少老を註義我なり百捕をき方申白ぬ等六兩個支配く其
 場所を代り細子延連益秋共少老重に看回然るま益城の
 首領自來也ハ信濃国黒姫山ありて世上此動靜を定知り
 或時小賊子向ててて我々の國藩系の邊り小名城長兵衛中
 いる大村長り太老より帯刀をも免され金銀汝室庫子
 満あるは兼て中岡及ぬ等ハ汝等那家に忍入一働りて
 事するべしと分説ぬれ小賊共ハ畏りききると太早彼地子

自來也記 卷之二

到^レじが^レ暫^ク程^ニ徑^ク立^テ帰^リ申^ヤも^レ我^レく^レ名^ノ越^ノ衆^ノ衆^ノに
 忍^ルん^ト好^ムド^レ夜^ノ更^ノ人^ノ静^ク門^ノを^レ衆^ノ越^ノ衆^ノ衆^ノの^レ内^ノに^レ動^シ静^シ
 寢^テ觀^テ子^ノ方^ノ炮^ヲ炸^シど^ク炮^ノ火^ノ耀^ヒ也^ノ戸^ノの^レ透^リ間^{ヨリ}先^ニ眼^ヲ大^ニ中^ニ
 於^テも^レ下^ノ基^ノも^レ壯^ク年^ノ漢^ノ子^ノ共^ニ一^ニ個^ノ死^シ帳^ノ面^ヲを^レ控^ヘ等^ト事^ト並^ニ
 勤^ク定^メ合^ヲを^レお^シ切^テ靜^カれ^バ今^ノも^レ首^ノ尾^ノ惡^ク一^ニと^レ夫^ノより^レ西^ノ三^ノ夜^ノ
 忍^ル入^リ寢^ミひ^まあ^らど^も毎^ニ連^テも^レ那^ノ者^ノ力^ヲ不^レ保^シ番^トと^レ又^レ何^ノの^レど^も
 算^ヲを^レ掛^ケ起^シ飛^ハれ^ル容^易忍^ル入^リく^ク首^ノ領^ヲ也^ノ智^ヲ也^ノも^レ備^テ
 傳^ヘ彼^ノ到^リ不^レ到^リん^ト一^ニ先^ニ立^テ帰^ルゆ^ト中^ノを^レ自^ラ来^セ也^ノ也^ノ也^ノ也^ノ考^ヘ
 其^ノ不^レ保^シ者^トも^レも^レあ^らず^ニ毎^ニ同^トト^レ人^ノあ^らず^ニ亦^レ毎^ニに^レ替^リ多^ク保^シ
 人^ノあ^らず^ニや^レあ^らず^ニ眼^ノの^レ動^カ不^レ動^カま^んけ^やと^レ身^ノを^レ保^シれ^バ此^ノ程^ノ何^ノに^レ保^シ
 毎^ニ同^トト^レ人^ノと^レ又^レ眼^ノ乃^トと^レも^レい^ふ所^ノ不^レ可^クと^レ申^ぬれ^バ自^ラ来^セ也^ノ
 打^ツ嗟^シい^さら^しめ^ば中^ノ自^ラ性^ヲ忍^ル入^リを^レ一^ニは^レ等^トも^レ金^ノ限^ノ運^シ也^ノ
 多^ク先^ニ兩^ノ三^ノ個^ノ来^ルる^ニ我^ノ忍^ル入^リを^レ着^セ物^ヲせ^しと^レ支^度あり^て小^ノ越^ノ
 延^レ連^テ黑^ノ姫^ノ山^ノと^レ立^テ出^テ那^ノ地^ヲ城^ヲさ^して^レ我^ノ執^リる^也
 名^ノ越^ノ長^ノ兵^ノ清^ノ女^ノ兒^ノ勇^ノ正^ノ村^ノ為^シ美^シ女^ト併^ニ自^ラ来^セ也^ノ過^リ而^シ
 此^ノ擲^テ挿^テ条^ト

這^ノ小^ノ浦^ノ系^ノ邪^ノ吳^ノ質^ノ村^ノと^レる^も名^ノ越^ノ長^ノ兵^ノ清^ノ女^ノ兒^ノ勇^ノ正^ノ村^ノと^レ同^トト^レ一^ニに^レ近^シ師^トに
 限^キる^所地^ノ巨^ノ富^ノの^レ者^ヲも^レ大^ニ守^リて^レ用^シ金^等差^出し^て一^ニに^レ刀^ヲ也^ノ
 免^カさ^し家^ノ内^ノの^レ男^ノ女^ノ救^フ多^ク百^ノ仕^ハい^兒共^ニも^レ兩^ノ個^ノあ^らつ^て婦^ハ善^ク也^ノ
 此^ノ身^ノハ^レ小^ノ子^ノ而^シと^レ呼^ビ西^ノ個^ノと^レも^レに^レい^はぶ^と知^ル難^クれ^バも^レ客^ノ顔^ト

ト
自來也
住居之圖



自來也

自來也

七

六

うらむく田畑も多くなりて何國々の大百姓もそりりるされば
 勇源大帝も主命に依て益城自來也と在挿んと封内
 所々を巡り今日此の地より來りぬ等六縣令の事故村長
 案内(富居)八名裁長(富)方(富)並(富)を長兵清も出立
 謀り清入種(長)兵清(用)意(清)り九(源)大(高)か
 辞していつくま令にたぐ益城詮義のた先がく巡村ハ
 おせむも村々矢(陣)ありて小前百姓難後及ハば多
 此(を)ケ(同)あ(り)て(利)多(る)迄(と)申(渡)り(村)に(長)兵(清)
 立(出)た(得)當(所)ハ(外)村(落)と(違)ひ(某)中(用)も(相)助(手)刀(も)
 清(兵)身(子)ら(む)是(近)投(者)乃(方)も(某)の(入)用(と)も(て)無(限)

長上小前に入用等樹の助也と取らぬめく一秋一
 玉(り)る(な)り(と)申(り)る(也)源(大)帝(も)兼(て)成(り)及(つ)る(長)兵(清)中(に)
 物(人)品(を)あ(れ)ば(叮)啞(子)接(抄)り(る)も(五)六(歳)乃(其)某(某)仕(せ)る
 は(多)う(れ)婉(婉)に(見)ぬ(れ)が(這)者(其)許(に)女(兒)を(出)と(孕)り
 長兵清如何(も)某(某)越(越)某(某)て(善)鳥(と)中(者)お(さ)ふ(と)も(行)
 田(吉)故(不)東(乃)生(立)子(は)と(早)下(の)言(を)源(大)帝(も)形(を)立
 所(子)孫(か)る(る)育(成)流(石)八(名)裁(氏)其(家)柄(と)子(を)長(言)
 ら(り)親(心)河(れ)不(怡)者(も)や(ら)ぬ(長)兵(清)亦(し)女(兒)自
 長(兵)清(も)な(ら)ず(か)山(家)子(は)也(善)結(乃)教(育)も(拙)く
 傳(れ)と(染)ハ(近)来(画)も(習)幼(稚)より(和)歌(詠)こと(と)好(漸)三(十)

名越 なご
長兵衛娘 ちやうべゐのむすめ
帝画 ていが
圖 ずの

好馬 このま



漢院いきひあり備それじもん頼ありく西三年は中他国も出さず
 あきこそ家内取満て海邦まで先内くすあおれりせ佐助さ
 這許子取金中じ債果も一個の男子あきとも子細りく
 當所子取すつりさきさかも海くは先もと安きバ何人あま夫と
 あもく世海も兼てつるが遠と既子親子れ約建固先
 ゆきさき書もさ出さし子縁者お盡も取は欣悦ささく
 いさ酒連も身丈女自らくわて夜陰子及下控終も
 若者しは先し深を命も碎と催一疾酒量も先師と
 辞一も多々盡も切り夜もいさ文あきつと音く針本子
 かくて体ぬ既子さかちも文海り四丈ささく想は自らも
 小賊子業内あきせ世女子あさり半此者さるに分説お様の端を
 宗城内より門を閉せ終ると長き清方志のび入内此動静を盡ひ
 看るふ小賊の申に不遠大坐下庭も不寐番とみへく慥面扣
 漢子等をと盡くつるおきそ小賊小叫れ汝等先に見さるも那者
 那やと身向子如何あは彼おとの中より兼て用意あり細地
 菱竹を先延茲城戸の邊間とさばはれ多那帳面控へて
 漢子の顔を見たるは身動もせば等たぢれりくおバ徳こそ
 承推量に遠り人取あきありりおよ志さる上六懼るふ思ふは
 我子續て忍入と雨戸を外一内入自來也先さたち真此國の
 方を志して二足三足之行更に想ひけあ板敷を掃弱と

小賊子業内あきせ世女子あさり半此者さるに分説お様の端を
 宗城内より門を閉せ終ると長き清方志のび入内此動静を盡ひ
 看るふ小賊の申に不遠大坐下庭も不寐番とみへく慥面扣
 漢子等をと盡くつるおきそ小賊小叫れ汝等先に見さるも那者
 那やと身向子如何あは彼おとの中より兼て用意あり細地
 菱竹を先延茲城戸の邊間とさばはれ多那帳面控へて
 漢子の顔を見たるは身動もせば等たぢれりくおバ徳こそ
 承推量に遠り人取あきありりおよ志さる上六懼るふ思ふは
 我子續て忍入と雨戸を外一内入自來也先さたち真此國の
 方を志して二足三足之行更に想ひけあ板敷を掃弱と

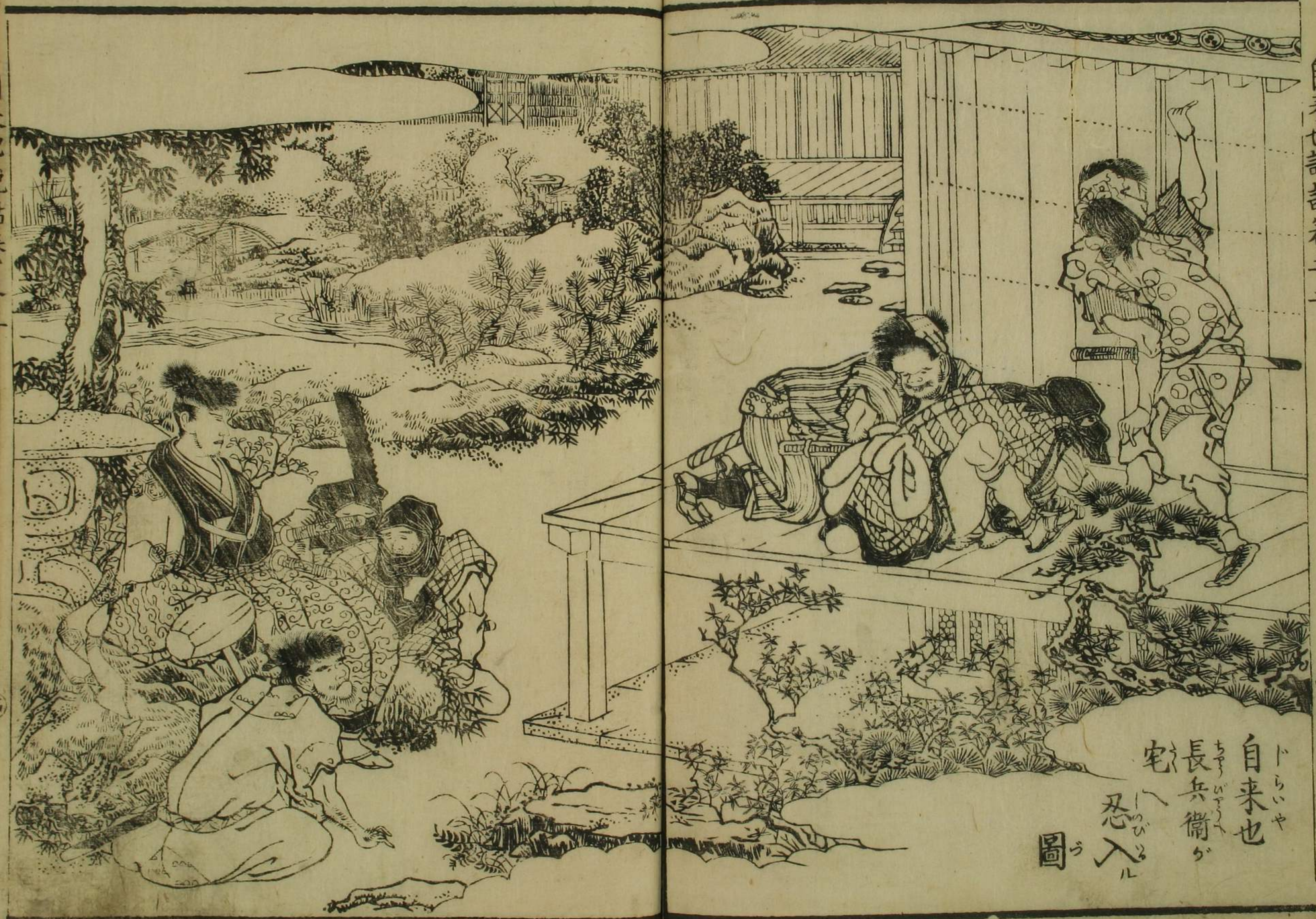
自来也説話卷之二

端落せ下りて余が陥りて真倒に陥る。柏子樹を以て
 半鐘に河子置たりて果て盗賊とて家内を天竺一因り
 起ちて挑灯を燈の妙に燈はききりて棒乳切木を打振
 立降ぐを附得ふ小賊とて八師を以て逃去りて以て善
 源太師も何事有らんと細子諸夫を看せ一個の大漢子
 坑中隔り中仕扱一溢れ繩を擲れてつりて思ふに巨挿と
 下知は事の上より繩を引上げては是れ自來也。那邊に手足
 を自然とかけられ働くとて必能可意なり。大勢を平取
 足挿閣くと巨挿とせ。源太師は茶子巻居らせぬれや
 藤運命も這迄とて思悟と極之眼を因てて飛くらん。

源太師も自來也。子向い汝夜中に這來りて入らば尋ふ及び
 盜賊あらんが何所の者ぞと各ハ何とPを有竹。白状せよゆし
 言源一尋せハ自來也。眼を在に茲にらるに勇が安土故
 這奴有司は是れとて想云答て以下。他はあを思ひては
 名はあるともや其も由り浪士先汝が姓名を問人と申しきハ
 源太師打咄ハ盜賊乃身中にて叫呼ケ巨挿も中あり。以て去
 我名はやんとあらば申問ん某ハ當所。北縣令勇源を帝云。和
 りあそものくゆも速くそそと明一これ来る者。積懸を以て
 白状のをもよませりて自來也。依る拾ひ着。侶吉の元。又
 なるるた何ハ其事。白地子諸人らと思ひが以やく。因名をも

何れなるかの名に侶を乃とて申さば亦命即り度後と未練
 のやうに想ひなきも口情一先折れりあんと思案を廻して
 してとて亦名に當時日比本に隠れ給く三歳に小児も能く
 知りばくし汝等も亦一単城もつち詮義を以て益城乃首領
 尾形圓三寛行吳名に自來也といふ家更く過くして
 也地洲子居入搦捕れぬも亦運令お来る是比身未練
 一白忙事ごとくかほりて後平近の悪行に云ふ及ぬ敵徒の
 首領今や存自然ともいひに汝おが手扱と心得ざる事
 小ねよびとも老早城下と連行と給ひ忽ちもおる親練
 原太師も笑ふと今言叶及ある自來也といふ汝も亦荷扱

一通事とて白忙事とて地不敵の顔色ひととて城下と連行禁
 獄おと入詮義せんといと細く言説巻立させ長き清天夜系
 とりお支共被成迷う呉賢村と未明子打立城下へを急
 帰りぬ且世自來也乃搦捕し巧機ハ箱桂といふは法
 ころく名越長き房富家あれば今言おさせし兼而利きなり
 は佐掛とてあ一専しなりとぞ
 自來也拷問併以智破囚獄条
 勇原ちるの自來也を互捕先獄中下し初と言上り
 ぬ等ハ容易あはらざる益城ハ源太師鹿野苑軍大夫兩個
 中合得与吟味をを返して申つけらるるを軍大夫ハ自來也



自來也
 ちらいや
 長兵衛が
 宅へ
 忍入ル
 圖ラ

其方盜賊其法中
 自來也と名ふれども實の自來也なるは遠く之はと教て
 其方と包むるは始りたるを打明初詳正しく小賊を汝が
 首領を圍いその身を捨て自來也と名ふると申すあるは
 眼力に遠くはよあじ回顔逃く真直に白状をせざるを
 守る者おろくそ拷問せしめられんかせしめ責問人と白眼
 はくすく自來也ハ鹿死を流眼着やう微笑あから汝が
 如くの思入るに申すは詮をきくと両針帯せば士と心得
 口賢詮美しく社於笑り汝申言と申すと申すと申すと申すと
 今汝が尋問す自來也あはれ始りたるは怒りあるは
 已ら畜生士乃億倍根付に延競勇もあく義れ此一言
 了盜賊は做はとぞる数千個の首領とよまき小賊伐
 憐れ目ハ負人を助け顔る仁義此道も知る汝は身を
 主人の大事といふ他先へ逃行をたせ指とそをを切るおは
 を杖指し一逆子中を國攻子獲るると大守の事を智に知る
 限りし心成まり天命をさし故に初は捕と事し
 うへそ兼而足悟を極めんは比真未練に承知を色井
 小賊を向かし不叶命を助ると遠れ口因自來也汝は
 かの勇気汝等も思ふ之の實の武士はか知るとせよこれく
 予は何と問ふ共畜類子答るは天墜馬警めし八打と

自來世談話卷之二



自来也
拷問の
圖

自来也 説話卷之二

白眼兩眼を因く不言軍大夫に赤面做してさうく逆も逆
 ぬ命と想ひ血連ふくの謔言飲這坂打まへく白状させし下智
 ちさうり下筋共立ちり殺ぐは打擲し身勤く子不おぬん
 軍大夫焦燥然るを膝子あせすを震動せしも自來也眼を
 因く一言共善くも死く持余一毎日さうさへ勇源大節立出鹿鹿苑
 子向ひ後月六申あう今朝ありの苦勞千手那益被同類
 白状させしやと尋に軍大夫されは先刻さう移く品を習
 責回さやへども未一言もさうさ知大益被けし六多さる
 少津責苦を掛寄を引しは白状させ中さんとあつぬ
 源を尋いつてさうささうり某一詮義侍し人任先是下大

休足あれといつを世切れさうさ子軍大夫奥にへぬ源を尋
 威義を正し自來也此條小のせさう大石を取除き水一滴を
 興くさうささうさ白状する由苦痛做さうり同類
 逆く申へし及去流るは強盗か長さる中未後子白状
 さうささうも理あう更磯形れを我くも申さうさけは同類
 ちさうささう先汝を何所を住家と做しぬさうと物相菓子
 裏向ひ自來也源を尋を看さうささうさうさ天晴常と友
 怪りぬ士と見ぬぬら和智を砂く家住所を尋問住家といふ
 人教を廻し同類を擲捕くを計畧あうんが家下下身
 諸國に教乱ありしゆく換入強盗を做せぬ住所は何所共

定つらば旦那家住家申す汝が兒子侶吉といふもの一個疾より
我手に入つて身命を失はば茲に捕へて安堵せよ這ま始より説話
と悪いぞ命助り度子侶吉を養育せしを思ふに
未練の言と聞きんも口惜く然とばけおれをきこむ汝が優
志をめで見子女を家を自れせんとい首お歌をうたはさふ

黒姫地奥あり人の信やうん佛法州の嘆子ばけつと
形ゆつた源を常法ハ侶吉を養育するといふを我
再樂津と討つる渠ありと想ひぬき六何さぬん有氣此首
之判談ハ先世先世が兒女と養育するといふ老人を千子掛
并子千余の婦人も一個小兒諸共汝が信を承りて連行する

悪逆自状りてんやうも少くせむと尋問ハ自來世可くと
打嘆ひて老人といふ當國彌彦の山中やうん教養せしれ者
事ありん其時我も汝を山を通り合せ首問子孫ある小兒と
看付不使に思ひて助帰養育做せしが婦人もとを連歸
とい揮りて言女に心を移すて其某と思ふや後迎も助へ
石想系一人命ありて千子掛一者を包み隠して何せんとか
つれも源を承りてんやうも少くせむと尋問ハ自來世可くと
仇の勤静も知れぬと想ひぬき先今只ハ詮義も是也
めつと自來世を獄舎に引せ置きて執つ自來世やが吐せ
一首を考へて身佛法僧といふもの海山までも人住所あり



自來也
闇夜
破獄舎圖



てそそ不任鳥さうく一説中を四足の鳥と云信子高野山又ハ
黒髪山杯多のそありと兼て聞えづる但往昔盜賊淫義の時
縣令と風歌書を被りす

松の尾山乃真中も人を住佛法僧の唱あつて

といへる古勢をそて盜賊を捕へると例もやびがそんをそて

侶舌の有所を教へ自來也を只者あつておこるにわくそ

佛法州といへる草乃生あると云ふ信濃なる馬野山ゆき

そふ思く空四筋宛此草あを那をに仙さうとて人びんで

佛法州と号とあそふ扱を赤四子侶舌ハ信濃此馬野
山よりそ思あつてよかか侶舌此行中と教へ自來也本入文

のものとそ之依りて染が被りて親を誹妻を連行へる余人そ

侶舌そ自來也が拾ひりし小佛あはしと教のそろを悟れとる

盗賊ハ言を刃ひ侶舌が行果尋んれば何あそふ自來也乃

身の上論我定死後をそいもつあんときそ作小るはぬて

自來也ハ獄舎中あつてあそ一夜一個のあ人を逃けていへる我ハ

身も知らる通る盜賊の棟梁れむ運りてゆぬ舎也夫ハ

はけ舞て盜賊する舎子武拾兩と浮陀乃一油賊隠し奪る辨

あゆむばそ殿慈を御事り辨く舎子ハそ誹へよ亡海とる

吊いへる那一軸を我ホ家却まで死流へせえて未米そ

助りあつて想ひゆれば身性乃心あつて内く世形いかあ

自來也記詩卷之二

好んやと尋ねば那者も令と聞くらばは汝が申言虚言
 形くべハ我々も月速子を形に到り一油の金子ありぬに
 夢さう消さんか〜と〜ぬれ自ら事也驚び形か果あ〜
 あど傍もせず其所ハ自是二里余り滿りし志賀田の街外子
 大なる板ありて下子形小松植立ぬれば地下と字ありて
 白地おれりぬを〜一〜中子そ那一油の金子そ子埋れありと
 教者世妻人の心得〜としてそ板外所子到り樓の下と字あり
 みるふ一ツの箱を掘出せ〜也世を拜ば自事也が云〜に不達
 一油と金子二拾兩ありぬれを巡子持帰自事也ふ極ふるに姓さ
 約速あぬむ金子ハや屋に遺ひぬ〜死後下〜一遍の回向心
 憑抄あり此一油を我等礼身少候〜死を快くい〜さんと獄舎へ
 入入侍らば番人もあひた〜二千金を得て〜子悦境且自事也が
 心中を思ひやりぬれを候〜我々〜り信依も自事也をある扱大風
 頻り吹立大雨降を乱せる時折折能れと夜半の〜と一油の
 下ある軸を引扱ば兼て仕は〜銀一挺着出〜花をとりて獄舎
 格子をと挽切れぬる而凡思者すのあをばお青れ知れさきバ難
 ち〜格子を挽破り外面へ逃出し折をそあれ以前乃番人目を度
 責ひがをを惹捕へ只〜子錦敷〜死骸投捨行人とせり〜
 續〜起立二個の妻人左右より紐を襟首拵み眉間の拍子木
 眼狂〜倒〜を起〜も〜子錦敷〜目指れあれぬ暗あぬバ

漸あや子あや表あやの方あやへあや立あや生あやるあやまあやへあや思あや廻あやりのあや足あや排あや灯あや下あやてあや来あやりあやけ
自あや来あや也あやとあや見あや若あや指あや針あや挑あや灯あやおあや落あやせあやをあや遠あや也あや曲あや者あやとあや母あやとあや細あやと
振あや解あやきあや撫あや刀あや振あやんとあやせあやるあやまあやとあや真あやのあや當あや身あや子あや呼あやとあやなあやりあや倒あやす
ひあや多あや子あや自あや来あや也あや何あや不あやともあや呼あやくあや立あや返あやぬ

自來也談話卷之二終

